光　In the Light

藤田 雅史

ひとり娘から結婚の報告を受けたのは、三ヶ月ほど前のことだ。それは相談をもちかけるものでなければ、許可を求めるものでもなく、文字通りの「報告」で、しかもたったの三行のショートメールという実に素っ気ないものだった。父親の気持ちなど、はなから問題ではない、ということらしい。

それでも気を遣ってくれたのか、相手の男とのツーショットの写真がいちおう添付されていたが、やはりそこからは、つべこべ言わずに承知せよ、という言外の強い意志が感じられた。

お前が選んだ男はどんなやつか。仕事は何をしているのか。年齢は。父親の職業は。訊ねたいことはたくさんあった。しかし、いかんせん俺は娘の結婚に対してどうこう言える立場にない。相手のことをとやかく言う前に、そもそも俺自身が、父親失格の身であった。

俺が娘と一緒に暮らしたのは、彼女が八つのときまでだった。

妻と離婚して、俺が家を出た。原因は俺に女ができたこと。すったもんだの夫婦げんかの末に、俺は妻子との生活よりも、若い女との新しい暮らしの方を選んだのだ。

娘の親権は当然別れた妻が持ち、養育費はさんざん揉めた挙げ句、俺がまるごと負担することになった。しかし、毎月きっちり口座に金を振り込んでいたのは最初の三年間だけ。

女にフラれて彼女のマンションから追い出され、会社が傾きかけて金の余裕がなくなると、毎月の振込が隔月になり、半年に一度になり、あとは別れた妻が女手ひとつで娘を育て上げた。

だから、俺には娘の結婚に口を出す資格などない。メールとは

いえ直接本人から報告を受けたこと、そして結婚式の招待状が届いたことだけで、十分、ありがたいと思うべきかもしれない。

俺は、娘に恨まれていたと思う。

「私、ほとんど片親みたいなものだよね」

面と向かってそう言われたのは、四年前のことだ。別れた妻の通夜の夜だった。セレモニーホールの控え室で、娘はぬるい茶を飲み、俺は通夜振る舞いで残った寿司をつまんでいた。それは、約十年ぶりの再会だった。

「お父さんがいなくなって、今度はお母さんか」

「俺はまだ生きてるよ」

「生きてるだけじゃん。私にとっては同じだよ」

同じというのはつまり、俺は死んだ人間も同然ということだ。別れた妻、奈美子は、脳梗塞による突然死だった。

仕事場で倒れ、救急車で病院に運ばれたが、連絡を受けた娘がかけつけたときにはもう事切れた後だったという。俺の携帯電話が鳴ったのは、それからさらに数時間が経ってのことだ。

「お父さんの番号探すのに時間かかってすごいムカついた」

そんなことを言われても俺のせいではないが、確かに腹が立つだろうな、と思う。娘のスマホに俺の番号は登録されていなかった。奈美子の携帯には登録されているはずだったが、暗証番号が分からずにロックを解除できず、結局、俺の会社の代表番号から取り次がれ、ようやく連絡がついた。

「なんかもう、勝手にこっちで全部やっちゃおうかと思った」

「すまん」

「こんなかたちでお父さんに会うなんて、なんか微妙すぎる」

「俺もだ」

隣室に別れた妻の遺体が安置されているというのに、すっかり大人の女に成長した娘を前に、そのとき俺はなんだか感慨深いような、若い女から親しくされて舞い上がっちゃうような、妙な不謹慎さの入り交じった複雑な気持ちだった。奈美子をこの世から

失う悲しみのようなものは、不思議とわき上がってこなかった。
火葬のとき、娘がいよいよこらえきれずに炉の前で「おかあさーん！」と大泣きしたが、隣に立っていた俺は、彼女の肩に手をかけてやってよいのか、ハンカチを差し出してよいのかもわからず、俯いてその場をやり過ごすしかなかった。元妻の親族に囲まれて、ただただ居心地の悪さだけを感じていた。
次に娘に会ったのは奈美子の三回忌の法要のときで、それから一度も顔を合わせずに結婚式を迎えるというのは、元家族とはいえいくらなんでも飛躍のし過ぎだと思う。
結婚式を迎えるにあたって俺が事前にしたことといえば、アパートの郵便受けに投函されていた結婚式の招待状の「出席」に印をつけ、ひとこと、おめでとう、と書き添えたくらいだった。しかもそれだけのことにすら、三日もかけて悩んだ。
途中で育児を放棄した俺みたいな男が、娘の晴れ舞台にいていいのだろうか。参加するとなれば当然、父親という肩書きで席次表に載るのだろう。親族のテーブルで奈美子の親戚連中に囲まれるのだろう。できることなら遠慮したい。
しかし、かといって実の娘に、両親のいない結婚式を挙げさせるわけにはいかない。相手方の両親に対して挨拶のひとつもせずでは恥をかかせてしまうし、不参加を表明して、これ以上娘からの不興を買いたくないという気持ちもあった。
だから結婚式に出席するのは、義理である。それに、娘のためというより、不甲斐ない過去への贖罪のためでもあった。

式はホテルの最上階にあるチャペルで厳かに行われた。
教会式と聞いて嫌な予感がしていたが、どうかバージンロードを一緒に歩かされるのだけは勘弁して欲しいと神に祈っていたら、その屈折した祈りがなぜか通じて、娘から呼び出されることはなかった。新郎新婦は腕を組んで一緒に入場してきた。
三十分ほどの休憩を挟んで、もうすぐバンケットルームで披露

宴がはじまろうとしている。奈美子の親戚が陣取っている新婦側親族控え室には居場所がないので、俺はさっきからホテルのロビーとトイレと喫煙所を行ったり来たりして時間をつぶしている。

今朝コンビニで買ったタバコはもうすでに一箱吸いきってしまった。奈美子が妊娠し、お腹の子が女の子だと分かったとき、それまでヘビースモーカーだった俺はタバコをきっぱりとやめた。その誓いを破って再び吸いはじめたのはいつだったろう。たしか娘が小学校に上がった六歳か七歳の頃、奈美子との関係がぎくしゃくしはじめたときだ。

当時、俺は仕事で知り合った取引先の若い女と深い関係をもつようになっていた。残業だ出張だ休日出勤だと、仕事を理由に家を空けては、こっそり女と逢瀬を重ねた。

罪悪感などなかった。妻にバレても、お前が俺の相手をしないのだから、俺はよそに相手を探すしかないだろう。なにがいけない？　そう開き直った。妻は俺のことを口汚く罵り、俺はそんな妻の言動や態度がそもそもの原因だと言い返した。

不毛な話し合いの最中、俺は台所でタバコを吸っていた。奈美子はイライラしながら換気扇のスイッチを入れ、わざとらしく咳き込んだ。俺は舌打ちで返した。なぜかそんな光景をよく覚えている。

しかし実際のところ、俺たちが別れたのは、浮気が原因ではなかったと思う。よその女との関係は、俺にとっても奈美子にとっても、ある意味で、いいきっかけだった。

俺たちは長い間夫婦を演じながら、お互いに別れる理由をずっと探していたような気がする。娘が生まれてから、俺たちは片手で数えられるほどしか肌を合わせていなかった。娘以外の話題で盛り上がることなど、ほとんどなかった。

性格の不一致。ひとことで言うなら、結局はそれになる。

世の中の大多数の離婚カップルと同じように、俺たちもその言葉に躓いてしまった。

とはいえ、夫婦仲が常に険悪だったかといえばそうではない。子はかすがいというように、俺たちは娘を介してお互いを認め合っていた。でも、俺の浮気の発覚という夫婦関係にとっての決定的な亀裂が生じるより以前の、家族三人でそれなりに仲良く暮らしていたはずの記憶が、俺はどうもうまく思い出せない。

俺も奈美子も、一生懸命に働いていたのは確かだ。

当時、俺は勤めていたハウスメーカーから独立し、建築家としてのステップアップを目指して自分の設計事務所を立ち上げたばかりだった。彼女は雑誌のライターをやっていて、育児の合間を縫っては取材だの原稿書きだのと忙しなく動き回っていた。

ふたりとも金の苦労の絶えない家庭に育ったから、自分の娘にだけは貧しい思いをさせまいと必死だった。娘が自信を持って人並み以上の人生を送れるように。望んだ進路を自由に歩けるように。親がそれを阻まないように。

ある時期までは、その生活に満足していたと思う。なのにどうして躓いてしまったのだろう。魔が差したのか。やはり性格の不一致か。もしその原因を、日々の仕事の忙しさや、それによって圧迫された精神的な余裕のなさ、思いやりのなさに求めるとするならば、俺たちはとんでもなくバカな夫婦だった。

気づくと俺は、タバコを肺の奥まで深く吸い込みながら、胸の内で奈美子に話しかけていた。

本当は俺じゃなくてさ、お前がここにいなきゃいけないんだよ。あの子の親はお前だろうが。俺はどんな顔して父親の席に座ってりゃいいんだ？　何もしてねえんだぞ。俺、この結婚式ですら祝儀以外、一円も出してねえんだぞ。俺はどうすりゃいい？　よくわかんないよ。ひたすら頭下げてりゃいいか？

お父様、と背後から慣れない言葉で声をかけられ、振り向くとホテルのスタッフが小走りに駆け寄ってきた。まもなく開宴ですのでどうぞお席に。はい、どうもどうも、すいません。

披露宴は壮大な入場テーマをＢＧＭに、華々しくはじまった。
純白のドレスに身を包んだ娘は、挙式のときもその姿を拝んでいるとはいえ、やはり何度見ても美しかった。隣を歩く相手の男も、携帯電話に送られた写真より誠実そうに見えた。少なくとも俺よりはましな男に違いなかった。
拍手の中を歩くふたりは、幸せそうだった。それを見届けることができただけで、俺は少しばかり父親らしい気分に浸れて満足だった。あとは親族テーブルで小さくなって、おとなしく酒を飲み美味い飯でも食っていればいい。
新郎の会社の関係者による乾杯があって、来賓の挨拶が続く。どうやら新郎はまともな会社のまともな従業員で、まともな人生を歩んでいる男らしい。
それから友人たちの挨拶が続き、最後に娘の高校時代の同級生がマイクの前に立った。新婦来賓の祝辞のときもそうだったが、俺が名付けた娘の名前が、俺の知らない人間から連呼され、ほめそやされるのを聞くのは、なんだかこそばゆい感覚だった。
「美季ちゃんは三年の夏休みの合宿のときに、今でも後輩たちから伝説として語り継がれるある事件を起こしまして……」
斜め前方のテーブルから小さく笑い声が起きたそのとき、すぐ近くで携帯電話の着信音が鳴った。誰かと思ったら、犯人は俺だった。うっかりマナーモードに切り替えるのを忘れていたのだ。
周囲の冷たい視線に晒されながら、俺はテーブルの下のクロスの陰に隠れてこっそり携帯を開いた。
「うえっ」
思わず着信音よりも大きな声が出て、スピーチが一瞬止まる。今度は会場全体の視線を集めてしまい、俺はぺこぺこと全方位に頭を下げた。メールの着信だった。それだけならおかしなことは何もない。しかし画面に通知されたそのメールは、あり得ないことに、奈美子の名で届いていた。

〈なにビクビクしてんの。携帯の電源くらい切っときなさいよ。まだそんなの持ってんの？　いい加減スマホにしなさいよ〉

なんだこれは。誰かのいたずらか。

まさか娘が俺に意地悪を、とひな壇に視線を移してみるが、娘は泣き笑いの表情で真剣に上司のスピーチに聞き入っていて、とてもスマホを手に隠し持っている雰囲気ではなかった。

〈そんなわけないじゃない。私よ、私。あんたに捨てられた私。もう、あんたがそんなにオロオロしてたら、あの子が恥かくじゃないの。全然変わらないのね、あんたって人は。俺はどうすればいい、俺はわかんないって、相変わらず自分のことばっかり。あのね、親が離婚しようが別々に暮らそうが、親は親なの。残念だけど、あなたしかいないのよ、あの子の父親は。だから父親らしく、今日ぐらい背筋伸ばしてもっとしゃんとしてなさい〉

混乱した頭をリセットしようとスピーチに耳を傾けてみるものの、内容はまったく頭に入ってこない。俺は再び画面に視線を落としてメールの続きを読み進めた。

〈あのね、親はこういう場所では、ちゃんとビール瓶持ってゲストのテーブルをまわって、皆さんひとりひとりに挨拶してこなきゃいけないの。何ひとりで飲んで食って満足してんのよ、バカじゃないの〉

〈いい機会だからついでに書いとくわ。もう死んじゃったから言うけどね、あんたと別れてから私が再婚しなかったのは、この日のためなの。あの子の花嫁姿くらい、あんたと一緒に見てやってもいいかなと思ったの。まさかねえ、それまでに自分が死んじゃうとは思わなかったけど。先に死ぬのは絶対あんただと思って

たのに〉

そのときだった。突然、白い強烈な光が俺を照らした。

警察に囲まれた凶悪事件の犯人のごとくハッと顔を上げると、司会者が俺の名を呼ぶのが聞こえた。花嫁のたっての希望で、お父様と一緒にお色直しにお進みいただきます、などと言う。

聞いていない。なんなんだこれは。

スタッフが近づいてきて、俺の背後で椅子を引く。俺は腰を曲げたまま、下痢を我慢しているかのような情けない姿勢で立ち上がる。

ひな壇からおりた娘が、ドレスの裾を持つスタッフを従えて近づいてきた。にやにやと、うろたえる俺を笑っている。勘弁してくれ。笑いものにされるのはごめんだ。言葉にならずに口をあわあわ動かしていると、娘はさっさと俺の肘に腕を回した。

「ほら、いくよ」

「なんなんだよ、これ」

「びっくりした？」

あはは、と娘は笑う。カメラマンが近寄ってきて目の前でシャッターを切る。感動的な音楽が流れはじめる。入場口の大きな扉が左右に開かれ、ガラス張りの通路から太陽の光が差し込んでくる。ゆっくりとこちらからお進みください、とスタッフが耳元で指示を出した。あ、はい…。

前を向けば、その場のすべての視線が俺をとらえている。美しい花嫁と極度の緊張でうろたえるその父親。これではいい見世物だ。しかし、前に進む以外に選択肢はなかった。いよいよ、俺は覚悟を決めるしかなくなった。

一歩、また一歩、会場の中央をゆっくり歩き出すと、拍手が途切れることなく左右から降ってくる。誰かが指笛を鳴らす。ひな壇の新郎が嬉しそうに手を叩き、俺と目が合うと深く頭を下げる。挙式の前に挨拶を交わしたばかりの新郎側のテーブルも皆、

親しみをこめた笑顔を向けてくる。

どうやら何も知らないのは俺ひとりだったらしい。

「心の準備くらいさせろよ」

「お父さんに意地悪してみたかったの」

してやったり、という顔で娘は俺の腕から手を離すと、やっぱこっちの方がいいな、とつぶやき、汗で湿った俺の手のひらをぎゅうと握った。

グローブ越しではない、じかに触れる娘の手。

そのぬくもりに、忘れていた記憶が一気に蘇ってくる。

丸っこくて短い指。ミニチュアみたいに精巧な爪。まだ小さくてふにゃふにゃだった手のひら。

その手をつないで、よく三人でおもてを歩いた。

家の近くの児童公園まで、駅前の商店街まで、保育園まで、よく通っていたファミリーレストランまで。春も夏も秋も冬も。いつも娘をまんなかに。

いい子だね、かわいいね。奈美子と何度も微笑み合った。確かめ合った。いたわり合った。俺たちは、幸せな家族だった。

妻とタイミングを合わせてその小さな手を持ち上げると、娘はきゃっきゃと嬉しそうな声を上げて宙に浮いた。欲しいお菓子や玩具を買ってもらえないときは引きづられながらだだをこねて泣いて歩いた。機嫌のいいときは同じ歌を三人で繰り返し歌った。

いつしか娘の方が俺たちの手を引いて先を歩くようになり、勝手に走り出すようになり、そして俺たちはその手を離した。桃色のランドセルを背負って、娘はひとりで小学校に通いはじめた。

俺の家族の記憶はそこで途切れる。そこが俺の終着点だった。

あの扉の向こうの白い光の先に、奈美子が俺たちを待っているような気がする。家族の記憶の続きがある気がする。

ふと横を見ると、娘は顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

俺はこれまで、娘にどれだけつらい思いをさせてきただろう。

きっと、この子はひとりで頑張る母親を勇気づけるために、周囲

の他の子どもたちよりも早く、大人にならなければいけなかったはずだ。そして、誰よりも母親からの祝福を待ち望んでいる今この瞬間、でもその母親はもういない。

　せめてこんなときこそ、俺が父親らしくしっかりしなければ。背筋を伸ばし、堂々と胸を張る。出口の扉まであと少し。

なあ、お母さんは見てるよ。ちゃんと、喜んでくれているよ。お前は知らないかもしれないけど、俺はちゃんと知ってるんだ。

　まっすぐに上を向いて歩こう。でも、どれだけ上を向いて歩いても、情けないことに、涙が頬を伝ってしまう。

■

※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。